

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

登山研修所の「安全登山普及指導者中央研修会」

今年も国立登山研修所の「安全登山指導者中央研修会」に出かけてきた。昨年の秋は長山協の50周年の事業と重なった関係でお断りしたので、1年ぶりの講師経験だった。今年は25名の募集に対し応募は50を越したそうだが、できる限り希望を叶えたいという研修所の考えで研修生は46名、講師の数も18名とこれまでにない人数での開催となった。すでにご存じの方もいると思うが、この研修会は山岳会のリーダーや高校の山岳部顧問を対象にした研修会で、「読図プランニングコース」と「登攀技術コース」の二つを同時展開で行なう。僕はこの研修が設定されてからずっと「読図プランニングコース」に関わらせていただいております、今年で4年目になるが、こんなにも大勢の研修生が集まったのにはビックリした。研修所としてはやや異色の2泊3日という短期のしかも「スキル」を身につけるための研修会ではあるが、やはりこういうことへのニーズがあるというのも現在の登山界の一つの縮図でもあろう。

僕の班には今年も全国各地の高校の先生方が5名参加され、他県の実情を直に聞くことができ、その部分でも例年同様勉強になった。長年顧問をされている先生から、今年始めて顧問になった先生まで、どの先生も前向きでとてもよい研修会だった。先週行なわれた全国高体連の拡大事務局会議でも耳にしていたことではあるが、三重の先生からは岐阜県の高体連登山部加盟校がなくなってしまったため、東海大会を開催できず、当番県を返上した（東海大会は静岡で実施した）と聞いて、寂しい思いをした。飛騨山脈をいただく岐阜県の現状は深刻である。顧問の不在がその一番の原因だと推測されるが、これは我が長野県においても緊急に検討を要することがらである。顧問の転勤で部活が衰退し、やがて廃部の憂き目に遭うという流れに抗するためには、何といたっても顧問の育成が急務である。毎年思うのだが、栃木県や山形県では毎年毎年新しい顧問の先生がこの研修会に参加する体制が確立している。費用負担も少なく中身も濃いこの研修会をもう少し全国に広げられないものだろうかと思つて改めて思った。

さて、2泊3日の研修の中身だが、初日は机上研修が中心で、読図の基礎、翌日の登山コースの事前研究、装備の確認などをみっちり行なった。その上で2日目は班ごとフィールドに出て、登山道や登山道を外れたコースで藪を漕ぎながらの読図を中心に総合的に登山技術を高めることとした。地形図と実際の道路のズレの確認や、登山道のない尾根や沢の登り下りにおける地図読みの実践を行なった。3日目は生憎の雨の中、地図に記載のない登山道を辿りながら読図力を高め、生徒を安全に通過させるための技術としてのフィックスロープの張り方と通過方法なども交えた。経年的に講師を務める中で、僕なりに、ある程度この研修会のノウハウも蓄積できてきたので、少し余裕をもって研修を組み立てることができた。他の素晴らしい講師陣に比べればよちよち歩きの僕のようなものがなんとか講師を務めることができているのも、これまで一緒に講師をする中で指導して下さった講師の皆さんや私を育てて下さった研修生の皆さんのおかげと感謝する次第だ。参加された研修生の皆さんは、全ての研修が終わった後、満足げにメ

ールアドレス交換をし、今後の交流を約束していた。僕にとってもまた新しい友人ができた。

岳人 7月号「高校山岳部の仲間たち」

岳人7月号に県ヶ丘高校の山岳部が掲載されているのに、お気づきになったでしょうか？部長の塩谷（しおがい）君の山への思い、高校生だからこそそのインターハイへかける熱い思いが伝わってくる。顧問の松田さんは「塩谷が大風呂敷を広げた」と言っていたが、群馬県から山をやりたくて県陵の門を叩いてきた逸材を得て、心中秘するものもあると思う。センターの講習会や新人戦、そして今年の県大会と会う度に成長する塩谷君と県陵山岳部には、インターハイでの活躍を期して心からエールを送りたい。

松田さんはこの記事のコメントで「立ち止まっただけではいつまで経っても頂（目標）に到達することはできない。何事も諦めずに、自己の目標を実現すべく努力することの大切さを、登山という行動を通してこれからも伝えていきたい。」と述べている。去年、一緒にヤズィックアグルを登った後、松田さんの粘り強さに改めて感服したが、帰国後テレビのインタビューに答えて「諦めるのはいつでもできる。でも苦しいときにここで諦めたらオレがいつも言っていることと違うことになってしまうと頑張った。」と苦しかった時の心情を述べていたが、そんな姿勢に感化された県陵山岳部の活動は、県内の山岳部の一つの目標でもある。本校の山岳部の生徒たちにはコピーをして全員に読ませたが、これからも県陵を手本に頑張らせたい。

槍ヶ岳とともに(菊地俊朗著 信濃毎日新聞社刊)

高校の山岳部の活動で山小屋を使うことはほとんどないが、北アルプスの山小屋には様々な面で支援をいただいている部分もある。先日、槍ヶ岳山荘の社長穂苅康治さんから「槍ヶ岳とともに」という本をいただいた。副題には「穂苅家三代と山荘物語」とある。著者は、元信濃毎日新聞松本本社代表でジャーナリストの菊地俊朗さん。菊地さんは、長野県山岳連盟（当時）のギャチュンカン遠征の時の記者で、以来いくつもの山関連の著作もものしている。大正6年の槍沢小屋開設以来95周年、また二代目の貞雄さんが卒寿を迎えるにあたり、穂苅さんの依頼で菊地さんがまとめたものだそうだ。

いうまでもなくこれは「槍」に魅せられた男とそれを受け継ぐことを定められた男たちの槍ヶ岳開拓物語だ。山小屋経営に当たる中で槍に魅せられ、写真家としてもその美しさや厳しさを伝えてきた親子三代。開拓者としての彼らにはそれに加えてもうひとつの側面もある。それは槍ヶ岳の開山者播隆への熱い情熱から生まれた研究者としてのそれだ。九十を迎えてなお矍鑠たる貞雄翁や康治さんからの聞き取りを通じ、菊地さんはそれら多面的な穂苅家の活躍とそれをめぐる様々なドラマを丹念に記録に残している。槍ヶ岳の開拓史のみならず、ある一族の執念の物語として、一読をお薦めする。

編集子のひとごと

今月号の岳人の県陵の記事の2ページ前に「下山後シリーズ」として私の高校時代からの行きつけのとんかつ&カレーのたくまが出ている。松本在住の者として、下山後に即行くことはまずないが、遠くから来ている人にとっては山から下りての「とんかつ」というのはわからないでもない。久しぶりにカツカレーを食べに行こうかな。（大西記）